

西部邁氏の自殺帮助

渡辺利夫

(拓殖大学学事顧問)

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部学部長、学長、総長などを経て、二〇一五年十一月より現職。

人間は言語的動物である。人生と社会のすべての観念は言語によつて操作される。観念操作において西部邁氏ほどに流麗な文筆の才をもつ思想家は珍しい。ラディカルの意味の一つは根源的である。そういう、西部氏の文章には時論であつても、時論の根源にあるものへの眼差しがいつも込められている。

昨今のマスコミのセンセーショナリズム、スキャンダリズムには異臭が漂う。大衆（マス）とは、時論の根源にあるものなどにはおよそ無関心で、日々を精一杯真面目に生きつづける者たちである。この大衆に向けて扇動的で醜聞的な報道を恒常に流し、それを自由民主主義者の言説でもあるかのように裝う、というのが現代日本のマスコミの嵌つた、つまりは陥窓である。西部氏はもう三十年も前の『マスコミ国論』でこういっていた。

「とくに日本にあつては、敗戦後の精神的空虚のなかに輸入も同然のかたちで持ち込まれた自由民主であつたために、またそれが階級的な社会秩序と宗教的な価値秩序を著しく欠くのを特徴とする日本の文化パターンにうまく適合したために、秩序なき自由と抑制なき民主が純粹培養されたのであつた」

自由と民主という、日本の慣習体系つまりは伝統とは異質の観念が導入され、これが自己肥大してしまつたのが現在だという西部氏の主張は、われわれの眼前で日々展開されているマスコミの怪しさと危うさを問う思考の基点だと私も考える。しかし私などよりはるかに深遠な観念世界を生きる西部氏は、伝統の破壊がこうまで手ひどい日本に虚無と绝望を抱きつづけ、それがもはや忍耐の限度を超えて自裁死を氏に選ばしめたのであろう。

西部氏の妖しいまでの観念操作に強く魅かれ、氏の自裁死に手を貸した二人の人物が自殺帮助の罪で起訴され、その後、保釈にいたつた。法治国家である以上、自殺帮助罪による起訴は当然である。関わった二人も起訴されることもなかつたとすれば、今後の人生を居すまい正しく生きていくことができないのではないか。義を尽くして刑法上の罪に服し、それが解かれて一段の人間的成熟に努めてほしい。